インドネシア・ジャワ島地震被災者緊急支援活動
（2022 年 11 月 25 日～27 日）
活動報告（AMDA インドネシア支部）

概要

2022 年 11 月 21 日（月）現地時間午後 1 時 21 分頃、インドネシア・西ジャワ州チアンジュール （Cianjur） 県を襲ったマグニチュード 5.6 の地震は 10 秒から 15 秒間の揺れを観測。地震の影響は、人的、公的な面のみならず、環境面においても甚大な被害をもたらした。地震発生から 24 時間後も、死者及び負傷者の数は継続して増加していった。

現地統計局によれば 11 月 21 日時点の被災人口は約 169,000 人。また複数の地域を横断する形で 5,000 人の避難民を出す結果となった。津波の発生は懸念されていなかったものの、被害の規模は、時間とともに増える各統計の数字に表れており、その数は絶えず更新されている。

政府は合同タスクフォースを通じて即座にこの緊急事態に対応。公的機関をはじめ、各地の団体が連携する形で被災者の救援が進められた。今回の救援活動は、AMDA インドネシア支部がチアウィ総合病院と協力して実施したものである。

活動目的

今回の救援活動の主な目的は、被災者に医療サービスを提供し、仮設住居などを含む被災者の基本的な生活ニーズを満たすことであった。またその時々で生じる懸案に適宜対処することも任務の一環であった。

活動地域

活動地域は、事前調査により具体的な場所を精査した上で、複数選出された。結果、政府の支援が十分に行き届いていないチアンジュール県内にある 3 つの集落、トゥンギリス村（Tunggilis）、パシルチナ村（Pasir Cina）、チャリウ村（Cariu）が選ばれた。

活動準備と事前調査

救援チームを派遣するにあたり、出発の数日前に被災地域において事前調査を実施。有効なデータを得る為、被災地周辺に在住するボランティア 1 名にこの任務を依頼した。

その後、AMDA インドネシア支部のボランティア達（後に現地へ赴くことになる当事者達）が出発に向けて準備を開始。今回の救援チームは、チアウィ総合病院ボゴールペインセン

ターのスタッフを中心に構成されており、その内訳は看護師、放射線技師、心理ケア担当者、救援車両の運転手、調整員等であった（末尾に詳述）。出発前日、医薬品等の購入、車両の手配、備品の準備、ロジ方面の調整が行われた。

今回のミッションでは、複数の遠隔地における活動を可能にする為、1 つのチームをいくつかに細分化した。準備の最終段階では、各地域の連絡窓口との調整や、スタッフ派遣に係る書類の準備などに追われた。

人的リソース

今回の緊急支援活動では、チアウィ総合病院がそれぞれの分野に特化したスペシャリストを揃え、AMDA インドネシア支部と連携する形で任務を遂行した。車両に関しては、救急車 1 台とバン 2 台、運転手 3 名を手配し、総勢 19 名の緊急支援チームと物資の輸送を行うことになった。

主な活動

全ての活動は、事前調査に即して被災者のニーズを満たすことを第一に実施された。とりわけ最もニーズが高かったのは、移動診療を含む医療サービスの提供ならびに基本的な生活支援であった。

活動日程については、3 日間にわたり、3 つの地域で支援を行う形式をとった。1 日目と 2 日目はトゥンギリス村とパシルチナ村において移動診療を軸とした医療支援を行い、3 日目は、チャリウ村で支援物資の配布を実施した。

活動を行うにあたり、車両は道路脇に安全に駐車できる場所を確保して駐車し、その後、メンバー達が徒歩で遠隔地の集落へと出向いた。田園が広がる中、雨によって滑りやすくなった勾配のある一帯を自らの足で辿り、被災した家屋の間を通ってそれらの集落へと向かった。

いずれの村落においても、各地域の形状に応じて複数の避難拠点が点在していた。具体的な状況として、1 つの避難場所に複数のテントが設置されている集落がある一方、他方では、まともなテントすらないところも散見された。また

雨によりテントの基礎部分が濡れて湿っており、老若男女が健康状態の良し悪しに関わらず、大人数で 1 つのテントに身を寄せている様子も見られた。

支援物資の内訳は地域によって異なるが、物資はスタッフが現地の状況に応じて徒歩で配布するか、オートバイを利用して配付した。

医療サービスの提供

医療支援は 11 月 25 日と 26 日の 2 日間、それぞれトゥンギリス村とパシルチナ村で実施された。避難者が身を寄せている約 10 カ所の避難用シェルターでは、1 ヵ所につきおよそ 12 棟のテントが設置されており、それらをチームが直接訪問した。

患者に多く見られた症状としては、体の痛み、発熱、下痢、呼吸器系疾患、不眠症、創傷洗浄、ペインマネジメントなどであった。それぞれのケースを想定して、チームは血圧計、携帯用の超音波検査機器、心電計、煮沸消毒キットなどを持ち込み、患者の対応にあたった。

2 日間にわたって行われた医療支援は、計 700 人の地域住民に行き届く結果となり、うち子供と大人の両方を含む 301 名が何らかの医療処置を必要とする結果となった。

緊急支援物資の配布

救援物資の配布は活動 3 日目にあたる 11 月 27 日にチャリウ村で行われた。物資として提供されたのは石鹸、歯磨き粉、歯ブラシ、シャンプー、食器洗い用洗剤、おむつ、インスタントラーメン、ユーカリオイル、フェンネルオイル、ユーカリバーム、ミルク、非常用テントなどであった。

まとめ

チームとしては、被災者に満足な支援を提供できる結果となり、成功裏に活動を終えた印象である。3 日間にわたって 3 カ所において行われた救援活動が、今後、被災者達の生活再建に寄与することを願っている。最後に、今回のチームに参加したメンバーを以下に挙げたい。

チームメンバーリスト：

1. Dr. M. Tsani, M.Kes, SpOT（調整員、整形外科医）
2. Dr. Henny, SpAn, M.Kes, FIPM（麻酔科医、疼痛対応）
3. Dr. Wahyu, SpAn, KIC, FIP（麻酔科医、疼痛対応）
4. Dr. Dhevariza, SpOT（整形外科医）
5. Dr. Roby（内科医）
6. Ns. Shofura,S.Kep（看護師、疼痛対応）
7. Ns. Iik Frida, S.Kep（看護師、疼痛対応）
8. Ns. Tatang, S.Kep（看護師、疼痛対応）
9. Selvy, AMD.Kep（看護師、疼痛対応）
10. Singgih, AMD.Kep （看護師、疼痛対応）
11. Ns. Asep, S.Kep（看護師）
12. Ns. Ilyas , S.Kep（看護師）
13. Topan Kris, S. Farm（薬剤師、疼痛対応）
14. Akmal, AMD.Rad（放射線技師、疼痛対応）
15. Nasril, AMD.Rad（放射線技師、疼痛対応）
16. Istiqomah, SI. Kom（秘書業務、疼痛対応）
17. M. Arsyad, S.Psi（心理ケア、ロジ担当）
18. Rully（ロジ担当）
19. Asep（運転手）